いま教育に

◉対談――向山洋一＆門川大作

問題行動の発見システム

門川　このところ、連日テレビや新聞で子どもたちの痛ましい自殺やいじめなどが取り上げられ、教育の本質が問われています。きょうは長年の小学校教師としての体験から独自の教育指導方法を確立され、いじめ対策にも熱心な向山さんと一緒にその解決の糸口を探っていきたいと思ってやってきました。

向山　私も最近のマスコミ報道を見ながらいろいろ考えさせられることが多く、久しぶりに門川さんの話をお聞きできるのが楽しみです。

門川さんといえば、この十数年間、京都の教育界で改革に次ぐ改革を実践され、輝かしい実績を残してこられました。国の学習指導要領を超える市独自の指導要領（京都スタンダード）を策定したり、地域挙げてのトイレ掃除を実践したり、教育長としての獅子奮迅の活躍は広く知られていますね。

門川　おかげさまで改革は着実に進んでいますが、新たな課題も見えてきますね。向山さんの教育研究グループも、いま一万人の会員を擁するまでになられたとか。

向山　私たちのグループは「TOSS（トス）」と呼ばれていて、日本で一番大きな教師の研究団体です。ここでは全国の先生方が持っている優れた技術や法則を標準化して、それを共有財産として他の多くの先生方に普及させ

TOSSランド主宰
向山洋一
むこうやま・よういち　昭和18年生まれ。43年東京学芸大学社会科卒業。小学校教師となり都内の学校に勤務。平成12年大田区立多摩川小学校を最後に退職。NHK「クイズ面白ゼミナール」教科書問題作成委員。千葉大学非常勤講師などを歴任。TOSSランド主宰、日本教育技術学会会長、日本言語技術教育学会副会長、上海師範大学客員教授。月刊『教室ツーウェイ』編集長。

るという「教育技術法則化運動」を推進しているんです。このほかにも優れた教育方法の研究を目的とした「日本教育技術学会」などの組織があります。

門川　そこでも、いじめなどへの対処が大きな課題になっているのでは。

向山　はい。実は先日も熊本の大学でいじめをテーマとした日本教育技術学会の緊急のシンポジウムが開かれましてね。北海道から沖縄まで約千人の先生方が自費で参加されました。いったいこのいじめの問題にどのように対処したらよいのか皆さん大変悩んでおられる感じを強く受けました。

私はそこでいじめ発見を病院のシステムに例えていくつかのポイントをお話しさせていただいたのです。

門川　病院のシステムになぞらえてとは？

向山　病気を発見するためにお医者さんはまず触診、つまりプロとしての目、触った感覚で相手が病気かどうか判断しますね。次に問診です。その人の状態を聞き出す。それでも分からない場合は検査という方法に移るわけですが、学校にはこの三つの問題発見システムがどれ一つとしてないんです。

門川　というと？

向山　まず触診。これは学校では教

貫くもの

深刻化する子どもたちのいじめや自殺問題。われわれ大人はこれをどのように受け止め、子どもたちを導いたらよいのだろうか。教師としての経験から独自の教育技術の法則を生み出した向山氏、京都市の教育改革を陣頭指揮し、市民ぐるみの教育改革を推進、正常化への道を開いた門川氏が語る教師や家庭が貫くべき姿勢とは。

京都市教育長
門川 大作

かどかわ・だいさく　昭和25年生京都府生まれ。高校卒業後、京都市教育委員会に勤務。立命館大学の夜間で学び卒業。総務部長、教育次長を経て、教育長に就任。その傍ら文部科学省「家庭教育支援の充実についての懇談会」委員など様々な公職を歴任。現在中央教育審議会「教員養成部会」委員、「教員免許更新制」ワーキンググループ委員、安倍内閣における「教育再生会議」委員を務める。

師の毎日の観察です。どのような観点でいじめその他を発見できるかというと、私はせいぜい五項目くらいでいいと考えています。一番分かりやすいのは、いじめられている子は机を離されるんです。教室の中で机を離されている子がいないかという一項目だけでも、八割は発見できるはずです。

それから子どもが教室で発表している時に「ヒュー」とか「へェー」といったからかいの声が聞かれる。汚いと言って給食当番をやらせようとしない。その子に寄るのを避ける。例えば、以上のような視点で見るのですが、その時点で発見するのは教師の責任です。

門川　もちろんですね。

向山　それでも見る能力がない先生もいますから、今度は問診という方法が必要になる。ところが、驚いたことに新聞その他で報じられるケースを見ると、学校が各学級で「いじめられたことはありますか」とアンケートをとっているんですね。考えてもみてください。クラスみんながいる中で「いじめにあった人を書きなさい」って言われて書けますか。「あいつひとり何を書いているんだ」と絶対にそうなることは分かっています。そんなことを堂々と学校でやっているわけですね。

問診は本来そういうものではないでしょう。熱があるとか動悸がするとか一人ひとりの症状を聞いて、何の病気かを診断する。学校の問診もそれと一緒で、例えばお金を貸してくれと言われたことがあるか。帰りに鞄を持たされたことがあるか。重たい給食の食器をいつも運ばされていないか。それがゼロ回か一回か二回か、それとも五回以上か。そのどれかに○（マル）をつけるようにしたら、誰がどのようにいじめられているかがすぐに分かります。

すばやい行動で問題に対処

門川　それでも分からない場合に「検査」が必要になるわけですね。

向山　はい。かれこれ二十年くらい前ですけれども、都内のある地区で私が責任者となってひとりぼっちの子の調査をしたことがあるんです。最初は先生方に「自分のクラスでひとりぼっちになっている子はいませんか」と軽い気持ちでアンケートをとりました。結果はゼロ。子どもが五百人もいてひとりもいないなんていうこと自体おかしい。私はそう思って、半年後に同じ調査をお願いしました。いないというならその根拠を示してもらうことにしましたが、やはり全員ゼロという答えだったんです。

これは調査方法が根本的におかしいと思いました。それでまったくやり方を変えました。子どもたちが校庭に行って帰ってきた時に、簡単な一分程度でできる調査を考え、先生方にお願いしたんです。教室に入ってきた子どもたちを起立させて、「太郎ちゃんと一緒に野球をやった人」「次郎ちゃんと一緒に縄跳びをやった人」と言って手を挙げた子を座らせる。そうするとひとりでいたという子が残るわけです。その子たちにどこにいたかを聞いて、それをそのまま記録してもらいました。

もちろん、クラス全員には「休み時間にはみんなで仲良く遊びましょう」と呼びかけて指導してもらいましたから、検査のための検査ではなく、どこまでも教育的検査です。

これを一週間続けたところ、一週間ひとりでいたという子がなんと三十二人いたんです。立派な先生も多かったのですが、そういう先生ですらこの実態は見えなかった。

つまり問題発見のためには、これまで述べたような触診、問診、検査という簡単にできるシステムを学校の教育計画に文書として盛り込むことが大切になってくるんです。

門川　そうして問題が発覚した時、どう対処するかが大きな課題ですね。

向山　そのとおりです。そこで私の池雪小学校では、いじめがあると推定された場合、二十四時間以内に会議を開くことを決めました。

門川　二十四時間以内。大変ですね。

向山　具体的な方針を決めるわけです。例えば様子を見ようというのは、方針ではありませんから採用しません。何をするかを決めて五日たっても改善されない場合、別途方針を決めます。

もう一つ、この問題が一度提起された時には学校全体のものとして処理し、かつそれが解決するまで責任者を決めるんです。責任者には校長がなりました。そしていじめが発見された場合、担任が即行動し、その子に会って味方になることを訴えます。「太郎ちゃん。いままで辛かったね。先生、気づかなくてごめんなさい。先生はどんなことがあっても太郎ちゃんの味方だから。校長先生も味方になってくれる」。そういうメッセージを即座に発するようにしています。

先日の熊本のシンポジウムでは、ある校長先生が「うちではその三日後、十日後、一か月後、三か月後に校長が家庭に電話をする」という報告もあり

ました。そうなると家庭から学校への絶大な信頼が生まれるんですね。校長先生がそこまで世話をやいてくれるのかと。これが処理のシステムです。

人間は人間の中でしか成長できない

門川　向山さんがおっしゃるように、常日頃から教師が徹底して子どもたちに近づいていくことが大切ですね。家庭にもそのことを求め、連携が必要です。私たちも「見逃しのない観察、手遅れのない対応、心の通った指導」ということをずっとやってきましてね。平成六年にはいじめ問題について、現場の優れた実践実例集を作成しました。それからすべての学校にいじめ対策委員会を常設機関として設置しました。問題にすぐに対応できるシステムの構築です。

向山　なるほど。

門川　子どもたちに関して、いまマイナスの情報ばかりが溢れていますが、最近嬉しかったのは、いじめや自殺が大きく報道される中、京都市内で中学校総合文化祭が開かれて、生徒が自主的に自作自演でいじめ問題を啓発するビデオや歌を発表したのですね。「君はひとりぼっちじゃない」とか「君が無視していることが相手の心を深く傷つけている」とか心に響くメッセージが込められていて、胸が熱くなるのです。

そうしたら生徒会役員が自分の学校だけでなく、他にも呼びかけたいと言い出し、その中学校を含めて三校の生徒会が全市の二百七十七の学校に働きかけたんです。三校とも以前は大変荒れた学校だっただけに、私どもも感動しましてね。

向山　素晴らしいお話です。

門川　強調したいのはあくまでも生徒たちの自主的な活動である点です。もちろん、そこには優れた先生の「分からんように、分からせている」指導があるのですね。自主性だけ言っていてはそこまでできません。全市生徒集会では生徒たちが「いじめをしない、させない、見逃さない」というアピールをしました。それに応えるように次にPTAや「おやじの会」など青少年育成団体の大人も共同アピールをしてくれたんです。

向山　全市的な運動として盛り上がったのですね。

門川　いじめ対策でも地域挙げての動きが確実に広がっています。そういう活動を通して私が感じるのは、結局人間は人間の中でしか学べないし育たないということですね。私は子どもたちのいじめは昔からあったと思います。だが傍観したり囃し立てたりする者はいまほど多くはなかった。そして大人を含め人間関係をつくれない人が増えているような気がしてなりません。だから悪いことをしても謝り方や仲直りの仕方が分からなかったりする。

向山　そのとおりですね。

門川　いま子どもたちの半数以上がビデオやゲームに一日四時間を費やしているんです。年間にすると千四、五百時間。学校の授業でも千時間くらいですよ。人間とは本来お互いの人間関係の中で喧嘩したり仲直りしたりして成長していくものなのに、そのような場は確実に減ってしまった。これは大人社会にもいえることで、自己中心主義がはびこり、子ども社会はそれを反映しているわけです。

失われた人間関係能力を取り戻すのは難しい問題ですが、家庭や学校、地域の連携を密にすることで、ともに子どもの学び、育ちに社会が総がかりにならねばと思います。京都市では子どもを育むための市民憲章づくりも進んでいます。

現場をサポートするのが教育行政の役割

門川　教育現場に目を移すと、いま気になるのは、全国のどの学校でも教育委員会等からいじめ対策等を強く求められ、そのたびに先生たちがパソコンの前で報告書づくりに貴重な時間を割かざるを得なくなっているのではないかという点です。

向山　それは言えますね。

門川　しかし素晴らしい教育活動を行っている学校に行ったら職員室は空っぽですよ。先生は教室にいたり運動場にいたりする。それで私はよく先生方に「手は縛れ」と言うんです。目と耳と口と足で仕事をしよう、細かい報告書を書く時間があったら一回でも家庭訪問をしよう、少しでも深く子どもと関わろうと。

我々も心せねばなりません。また現場が多忙すぎます。

先ほどの向山さんのお話のように、校長先生が家庭にきちんとフォローしていくことこそ重要であって、報告書がいくら立派でも駄目です。だから私は「報告書は三行でもいい」と言うんです。しかしマスコミも含めて世間がなかなか許してくれませんね。

向山　同感です。

門川　現場で肌と肌が触れ合う実践をしていかない限り、感情を揺さぶらない限り、子どもも親も変わりません。

そこをいかにサポートしていくかが教委の本来の役割ですね。

また学校でいじめや何か問題が発生した時、学校だけで対応できない場合には、まず教委が出ていって学校と一緒に考え、取り組まねばなりません。例えばマスコミに何百社と押しかけられたら、それだけで学校の機能はストップですからね。

向山　まったくそのとおりで、教育委員会が支えなくては、校長先生はたったひとりで戦うことになるんです。

事件が起こるでしょう。すぐにマスコミが押しかけてきて、報告を聞いて飛んで帰ってきた校長先生に「いったいどういうことなのか」と質問する。でも校長先生は知らないわけですよ。だって知っていれば解決しているわけだから。仕方がないから「早急に事実を調査して報告します」と応対する。すると「なんだその答えは」と怒鳴られるわけです。

門川　教委にも電話がかかるから校長に聞く、地域からも多くの人がくる。子どもや職員に対しても正常な教育活動の維持を指導しなくてはならない。危機管理を担うのは校長先生、せいぜい教頭先生の二人しかいません。

六年前、京都で小学生が殺される事件が起きました。事件発生が十二月二十一日、逃走中の犯人と思われる男の自殺が翌年の二月五日。その間、私は年末年始も一日も休まずに出勤し、教委の職員を常時五、六人、学校に張りつけて校長先生や学校体制を組織を挙げてカバーしていきました。

向山　問題が大きいほど正常な判断ができないし、状況もすぐに揺れ動きます。そこをきちんと理解して支援してあげないと、さらに悪い事態が生じることもあります。最近でも教育委員会がうまくサポートできなかったために、マスコミから袋叩きにあって自殺してしまった福岡の校長先生がいらっしゃいます。だから事故があったら教育委員会はとりあえず学校に入って校長先生を支えることからスタートしなくてはならないんです。

「親の対応次第で子どもたちに強い精神力を身に付けさせることができます」

増え続ける モンスターペアレント

向山　青少年の問題行動が増えているのと同様に、この五、六年の間に確実に増えているのが、われわれが「モンスターペアレント」と呼んでいる怪物のような保護者の存在です。見たことのないような親がいます。

どのくらいすごいかというと、小学校の授業中に母親が毎日乗り込んできて「こんな教師の言うことは聞くな」と延々二十分、三十分と演説するんです。しまいには「土下座して謝れ」と。こんなことが続いてごらんなさい。学校は壊れてしまいます。

門川　担任を替えない限りは子どもを学校に行かせないという人もいますからね。親が「子どもを人質に」自己主張ですね。一つには、昭和五十年代に荒れる学校ということが言われ始めました。その頃の世代がいま親になって二世代で問題が起こっているようにも思えます。

向山　そう、二世代なんですよ。そのモンスターペアレントによって壊されてしまった管理職や教師は全国に数多くいます。

門川　昔もなかなか理解していただけない親はいました。だがその周囲に「そんなことまで言ったらあかん」というおじいちゃん、親戚、近所の人がいたんですね。いまはひとり親家庭が増えたり、核家族化や地域力低下によって親が孤立しています。自分の子どもがいやがることは全部相手が悪いと認識して、自己主張される。

向山　問題となっている給食費の未払いにしてもそうでしょう。どこかのテレビで「お金がなくて困っているから」と報じられていましたが、私に言

わせたら冗談じゃないですよ。そういう家庭には生活保護や準要保護という形で給食費相当分の補助金が出ているんです。給食費をもらっているのに払っていないのです。それなら最初から補助をもらうべきではないんです。それに経済的に余裕がありながら「払う必要はない」という家庭もたくさんあって、それは日本中に利己主義が蔓延（まんえん）している表れ以外の何物でもありません。

門川　ただ、ありがたいことに京都市の場合は年間通して払っていない給食費滞納者は三十人くらいです。

向山　素晴らしいですね。誤差の範囲じゃないですか。それもまた地域挙げての取り組みの成果でしょう。

門川　結局そのへんも含めて、京都市では学校、家庭、地域社会の連携を強めるために、ＰＴＡの活性化、学校評議員、学校運営協議会を機能させています。要するに学校のサポートチーム、学校の応援団ですね。サポートチームは学校に対して厳しい注文をつける。と同時に学校のために一緒に汗を流して協力する。通学区域の自由化をせず、モンスターペアレントのような存在に対しては親同士の立場から、あるいは地域の立場から説得していく。そういう作業を困難ですが地道にやっていく以外にはないと思います。

向山　大賛成ですね。成功しているところはどこもそうなんです。小さな問題でも親全体で相談してもらって、具体的な行動として示していく。最初から大きなことに取り組もうとするのではなく、小さな話でも親同士で相談するような仕組みをつくると、モンスターペアレントのような人たちは減っていくことでしょう。少なくともいま私が知っている手段として京都市のような取り組みは最も有効だと思います。

門川　学校評議員や学校運営協議会は京都市独自のものではありません。開かれた学校づくりを推進する国の方針で全国で取り組まれつつあります。親や地域の代表が校長の学校運営方針を承認したり意見を言っています。学校を評価し注文をつける制度です。うちが最も多く、また他自治体と違うのはボランティア活動への参画などで学校と一緒に汗をかく〝共汗（きょうかん）関係〟を築き上げることに重点を置いていることなんですね。

向山　なるほど。〝共汗関係〟ですか。

門川　いまよく連携、連携と言うでしょう。その時は必ず相手に何かを求めようとする。だけど相手に求めるだけではなかなか物事は実現しません。実現させようと思ったらまず自分が変わらなくてはいけないんです。学校が閉鎖的な体質を変えないといけない。教師は信頼されなくてはならない。

私は「過去と相手は変えられないが、自分と未来は変えられる」という話をよくするんです。教師の意識と行動を改革して、学校が本当に開かれたものにしていく責任を果たそうと。それでこそ「あなたは子どもたちのために何ができますか」という形で家庭や地域に行動を求め互いに高まっていくことができます。

向山　それだけ教師の責任は重大だということですね。

「子どもたちの問題行動は、自己中心主義がはびこる大人社会の反映です」

道徳とルールをごちゃ混ぜにしてはいけない

門川　子どもたちに、いかに道徳心を育むかという点でも、親とともに教師の役割は重要になってきます。

向山　先ほど私はいじめの発見システム、対処システムについてお話をしましたが、実際に子どもたちに教えるに当たっては座標軸が必要だと思うんです。

門川　座標軸ですか。

向山　いま日本全国で心の教育が叫ばれています。だけど私はルールこそ大事だと思うんです。心の教育とルー

ルの教育はまた別なんですね。例えば、自動車学校では他のドライバーや歩行者のことを考えながら運転しなさいという指導を受けます。これは心の指導です。その一方で車は左側を走行しないといけない、信号を守らないといけないというように、きちんとルールを教わります。そのいずれかが欠けても正しい運転はできません。

いじめ問題にしてもしかりです。ルールはルールとして教えないといけない。当然法的な問題も踏まえて、いじめは犯罪なのだとしっかり認識させる必要があります。

門川　確かに。

向山　警察に問い合わせをして、いじめがいくつの犯罪に該当するか調べてみましたら、二十項目くらいに当てはまると分かりました。借りてもいないのに「この前の金を返してくれ」と脅す。これは恐喝罪であり詐欺罪です。ここを押さえるだけでも、子どもたちは随分違ってきます。

もちろん、心のことを教えるのも大事です。「自分の友達じゃないか」とか「誰かがいじめられそうになったらみんなで止めよう」とか。だけど、心というのはどうもつかみようがないんです。これは元文部省の役人で政策研究大学院教授の岡本薫さんが強く主張されたことなのですが、心に焦点を当てる前に、明確につかめるルールを教えることが大事ではないかと。だけど、いまの教育現場はどうしても心だけで終わっている感じがしてなりません。

門川　そのことについてですが、京都市では河合隼雄（はやお）先生を座長に道徳教育振興市民会議をつくって三年間にわたりいろいろな議論を重ねる中で、内面から湧いてくる道徳と、形からはめなくてはならないルールをごちゃ混ぜにしてはいけないという話になったんですね。

向山　そうなんです。

門川　市民会議では、自分たちが共有できる価値観は何かを探るために一万人のアンケートを実施しまして、なんと二万二千三百人の方から回答をいただきました。そのアンケートをするに当たって、予備調査として四百人を超える方に、「生きていく上で、あなたは何が一番大事と考えられますか、十項目まで書いてください」、そんな事前調査も行いました。これらをもとに道徳教育の指針を、「はっきり教える、伝える」「しっかり見せる、示す」「じっくり語り合い、考える」「たっぷり体験させ、共に活動する」、この四つに分けて、それを軸に運動を推進していったんです。

向山　なるほど。ルールの部分をしっかり考えられているわけですね。

門川　私はボーイスカウトにも関わらせてもらっていますが、そこでのルールは「誠実である」とか「礼儀正しい」とか「勇敢」「感謝の心」「質素」「いたわり」等、端的で具体的です。ところが、学校に行きますとね、「美しい心を育てます」「個性豊かな人づくり」と非常に漠然としているんです。

向山　重要なご指摘です。

門川　少し話はそれますが、学習指導要領には「恩」という言葉がありません。それから「忍耐」「我慢」という言葉もそうです。

向山　どうしても「個性を大事に」というほうに流れてしまいますからね。

門川　優しさ、確かに大切ですよ。私は全市の小中学生が集まる会で「優秀という字は優れて秀でると書く。知識に秀でる、技術に秀でる。それも大事やけど、一番大事なのは優しさに秀でることだ」と説明したんです。そうしたら校長会長が締めの挨拶（あいさつ）で「優秀の優という字は憂える人のそばに人が寄り添うという字だ」と。これには一本とられました（笑）。

この優しさというのも本来は厳しさ、忍耐力と一つなんですね。子どもたちに教える時は、その大事なことをきちっと押さえることが大事だと思います。

親の対応次第で子どもの心身はたくましくなる

向山　その意味では、いじめに負けない子をつくることもとても大事な視点ですね。もちろん武道やスポーツを習わせて強い精神力をつくることも必要ですが、私はそれに加えて大切なのが親の対応だと思うんです。

門川　どういうことですか。

向山　ある子どもの作文に次のような内容のものがありました。小学校二年生の男の子なのですが、その子の足の裏にアザがある。友達から「足に汚いものがついている」と言われ、泣きながら学校から帰ってきてお母さんに「なんで僕の足にへんなものをつけて産んだんだ」と訴えるんです。するとお母さんはあっけらかんとして「あれはお母さんの子どもの印なんだよ」と答えるんですね。

弟二人にも同じようなアザがあって、「地震があったってこの印があれば、お母さんはすぐに見つけてあげるからね」と得意げに言う母親を見るうちに、悔しさはどこかに飛んでいき、「これはう

ちの子どもという印なんだ」と自慢したくなった――という話です。

門川　素晴らしい作文ですね。

向山　普通なら「なんでそんなことを言わせるんですか」と学校や相手の親に食ってかかるところを、親の対応いかんでは強い精神力を身につけ、親子の絆が強くなることになるのです。こういうことを親御さんにはぜひ知っていただきたいと思います。

門川　いまの子はあまり人と接していないためか、部活動のちょっとした人間関係でもすごく悩んでしまうようですね。親のほうも「いやなことをされたら全部いじめと思え」という言い方をしますけれども、これから厳しい国際社会の中で生き抜いていかねばならない子どもたちが、いやなこと、危険な目に遭った時にどのように困難と立ち向かい、乗り越えるかということを本当は教えないといけないんです。

向山　私がまだ現職の教師時代、ある小児科の先生が「保健室にいつも行っている子は駄目だと思われているけれども、そうではない。しょっちゅう擦りむいて赤チンをつけているくらいでないと、大きな傷の時に防衛体力がつかない。小さな怪我を経験しない子は転倒しても手が出ないので、そのまま鼻から落っこちて大怪我をしてしまう」とおっしゃっていました。私もそうだと思います。

門川　いま家庭が非常に過保護、過干渉になり、一方で放任です。そのへんを学校、地域社会を含めてどうしていくかが課題なのですが、そこで最近よく言うのが「人間浴」なんです。人間の力を浴びる。

向山　海水浴が水を浴びるように、日々の生活の中で人間と触れ合い、その中で成長するという考え方ですね。

門川　ええ。それで京都市の中学二年生一万人は三千三百の事業所の協力を得て五日間、いろいろな職場体験をしています。あるいは様々な分野の人からゲストティーチャーとして話を聞いたり、保育所やデイサービスセンターで福祉のボランティアをさせたりしています。

ある中学校に茶髪で爪に派手なマニキュアを塗った女の子がいたんです。学校にも来たり来なかったりで、指導困難な子だったんですが、保育所に頼んで職場体験を受け入れてもらった。担任の先生がなんとか髪の毛だけは黒く染めさせて連れて行きました。そうしたら、保育士さんがその子を見て「その爪なんですか。子どもに近づかないでください」と怒鳴り出したんですね。

先生が「ああ、これで怒って帰るな」と思ったら、その子、目の前にいる園児を見るうちに「爪切りありますか」と言って自分で爪を切って、その保育所で子どもと関わらせてもらった。そして最後の日には涙、涙だったというんです。

先生でも切らせられなかった爪を、子どもたちが切らせてくれた。そういうことが実際に起きるんですね。

向山　まさに人間浴です。

なぜ学級崩壊は起きるのか

向山　これまでの話を踏まえて、門川さんはいまの教育はどのようにしたら再生できるとお考えですか。

門川　最大の課題は学校での学びと家庭生活、社会生活が乖離している点にあると思います。学びが生きて働く知恵になっていない。だから学ぶモチベーションが高まらない。

昔だったら理科で電気のことを学んだら家でコンセントを直してみるとかいろいろなことをやったわけですが、学ぶのは成績を上げるため、いい学校に行くためという発想になると、生活の中に学びの成果が出てこないんです。これを打開するにはまず家庭での役割分担や地域ぐるみの体験学習の充実とかから始める必要があります。

そして、それを実現するために学校、家庭、地域が足りないところを批判し合うのではなく、互いに補い合い融合する仕組みをつくるために、それぞれが一歩を踏み出さないといけません。

もう一つ、これは向山さんがご専門ですけれども、先生の専門性、指導技術、指導力をもっと高めることですね。教師はどうも人の真似をしたがらない。せっかくのいい技術があっても広がらない。そこで京都市ではカリキュラム開発支援センターをつくりました。

向山　家庭教育のほうからお話しさせていただきますと、子どもたちの小学校の六年間は極めて重要な時期です。にもかかわらず、いま（改正前）の教育基本法には家庭教育の項目がない。あるのは学校教育と社会教育であって、社会教育の中に括弧して家庭教育と書かれてある。新しい基本法には家庭教育が盛り込まれることになっていますから、それは大賛成ですね。

だって、かつては文言に盛り込まなくても家庭教育はしっかり機能していたわけでしょう。でもいま小学校入学式の段階から走り回る子がいたり、ま

さに子捨て状態に入っているわけですから、ここで家庭教育を再建しなくては、これから大変な時代を迎えることは間違いありません。

門川　私もそう痛感しますね。

向山　次に教師の指導力の問題ですが、第二次世界大戦が終わった時、日本の教育界挙げて反省するんです。「これまで教育技術ばかりにとらわれてきたために日本は戦争をやったんだ。これから個々の教師に必要なのは一般教養だ」と。そして伝統ある技術、方法を否定して教養を重視する形になり、それが今日まで続いているわけです。

言い換えると先生方は学は修めたけれども術は全然学んでこなかった。教える人もいなかった。そうすると日本中に膨大な数の我流がはびこっているわけです。自分が考えたからいいとか真似するのはいやだとか言って基礎的なことさえ学んでいない。その基本なしに最初から自分でやるわけですから、医学書を読んだばかりの人間に、いきなり外科の手術をしろと言っているようなものですよ。

それで現場ではどういう状態が起きるかというと、新卒の教師が来て九割くらいは、二か月で学級崩壊になります。大変な騒乱状態です。

門川　実践的な指導力が大切ですね。

向山　最初の三日間くらいは静かなんです。これは前の担任からの置き土産。よく言うことを聞くんです。「なんだ私にだってできるじゃないか」「子どもはかわいいな」と思っているうちに、たちまち手がつけられなくなってしまう。

学級運営においては、給食や掃除当番にしろいろいろなルールをつくらねばなりません。教室の中では教師の発言が立法作用です。法律である以上、クラス全員に言わなくてはいけないのに個々に対応してしまうんですね。ここに学級崩壊の大きな原因があります。

給食を例に申し上げますと、「先生、野菜を残していいですか」と子どもが聞いてくる。「調子悪いの？　できるだけ食べなさい」。次の子がやってきて「野菜残していいですか。熱があるみたい」「いいよ全部残しても」。もう一人の子が「これ残していい？　俺野菜嫌いなんだ」「いや、頑張って食べなさい」。

これは三つとも微妙に違うわけです。子どもたちの中に入ると、先生はああ言った、自分にはこう言ったと法が独立して作用している。給食に限らず持ち物から何から全部そうです。この一人ひとりの対応で教室はぐちゃぐちゃになってしまうんですね。

教師は立法作用ですからクラス全員に言わないといけません。「いま太郎ちゃんが来て、熱があって野菜が食べられないと言ってきた。そんな時は食べなくてもいいよ」。こういう言い方をすれば、子どもたちはすーっと分かるわけですよ。

お互いの良いところは素直に認め合う

門川　一斉授業の大切さですね。これまで個性に重点を置くあまり、四十人の子どもにビシッと一斉授業をするということをあまり重視しなかったわけです。

向山　そうなんですよ。

門川　京都市は何をしているかといったら、京都を中心に四十八の大学と相互の共同研究、ボランティア協定を結んで、いま千八百人の学生がインターンシップ等をやっています。それと同時に教師塾を立ち上げていて五百五十人の塾生に、学校の先生たちがボランティアで講義をし、塾生は学校現場で素晴らしい授業を盗んでいます。さらに十日間の採用内定者の事前研修を実施しているんです。

向山　必要なことばかりですね。

我々ＴＯＳＳのほうでも技量検定といいまして、全部で四十段階の検定を行っています。例えば、授業をやる時に紙を見ながらやるというのは問題外。歌舞伎役者が台本を見ながら台詞（せりふ）を言うのと一緒ですからね。それから授業を開始して十五秒以内に本筋をつかまないといけない、目線はきちんと子どものほうを向く、指示や説明は極めて端的に短く、というように授業をする時の様々な基準を求めていきます。

門川　そうやって訓練された教師を育成されているわけですね。

向山　ええ。先ほど学級崩壊の話をしましたが、崩壊して校長先生から何のサポートもしてもらえずに「おまえ、教員に向いていないから辞めろ」と言われてノイローゼになった先生がいるんです。そういう人たちも駆け込み寺みたいに何人も来ておられますしね。

門川　再生工場ですね（笑）。

向山　まさにそうです。先生にしてみても、難しい試験を通過して小さい時からの夢を実現させ教師になったのだから、ちょっとくらい失敗して「さあ、辞めろ」なんて、そんなわけにはいきませんから。

門川　向山さんのいまのお話のように、いいものはどんどん真似したらい

いと思うんです。形というのは〝型の知（血）〟ですから、型を学んでそれに自分の知恵や血液を入れる。その上で自分のオリジナリティーを発揮したらいい。

私はいま安倍内閣の教育再生会議のメンバーを務めさせていただいていますが、ここでは社会全体が子どもたちのためにいま何を為すべきかを熱心に議論しています。多様な意見が出ており、もちろん一色に染める必要はないと思いますが、私はこれからの地方の時代、地域社会の中で次の世代を育むことが一番大事にされないといけない。「当事者意識」と「参画」「公開」をキーワードに志高く行動する。そして、国は各地方の素晴らしい取り組みを激励し、お互いの長所を取り入れながら、遅れているところには徹底して指導していくのがよいのではないでしょうか。

いま子どもたちのために何をしてあげられるのか

門川　お話をしながら思うのは、教育において重要なことは昔もいまも変わってはいないということです。そこには何か貫くべきものがなくてはなりませんね。

向山　教師の基本は何よりも教室の中で教えることです。授業が上達し、その内容も魅力的になるように修業を積んでいかないといけません。つまり、子どもたちが授業に集中する、試験だったらクラスの平均が九十点以上を取るという具体的な行為をさすんです。教師がまず貫くべきはこれですね。

ところが、いまの教育現場を見ると、算数の教科書の半分以上を宿題にしているところがあるんです。「計算問題はみんな宿題でやりなさい」「漢字は家で教えるものだ」と。これはとんでもない話で、教科書にあることをちゃんと教える、しかも魅力的で授業に集中できるように教えるのが教師の役目です。そのためには教師に技量が求められるんですね。

だが、教師になった途端、一人前になったと錯覚する人がいるわけです。テニスでも書道でも一週間、一か月間練習を続けたら人に教えられるかというとそうではない。一所懸命やっても三年は必要です。教師も同じなんですね。教えるという行為に対して、ちゃんとプロの目を持ったコーチがついて、三年くらい修業をしてやっと一人前になれる。それがあってこそ授業の中で様々な感動も生まれます。

例えば私、跳び箱を跳べない子のほとんどを一、二分で跳ばせることができます。これは授業を続ける中で考え出したもので、コツを覚えれば誰でもやることができるんです。そういう腕を持っているのが教師であって、そうなれるよう自分を磨いていくことが大事です。

それに併せて国家全体としては頑張っている先生方が本当に力を出せるだけの仕組みづくりをお願いしたいですね。理念や方法は違っても子どものためを思って、何かをしていこうという先生たちの思いは一緒なわけですから。

門川　教育において貫くべきことはたくさんありますが、いま強調したいのは経済の格差に厳しさを感じているということです。これが子どもたちの学力や進路の格差につながってはならないと。また感性や志の格差も気になります。豊かで学力も高い中で、ひ弱な子ども。困難な条件の中で希望を失っている子ども。そうした中で私たちがやるべきことは、やはり一人ひとりを徹底的に大事にすることに尽きます。

課題のある子がいたら、教師や学校がその背景にまで迫る。学校だけの力で無理なら、やはり親も変わり、地域も変わらないといけない。要は子どもたちに関わる人々が労を惜しまず手間暇かけて総がかりでやることが大事です。

向山　教育とは手間暇かかるものですからね。

門川　教師の専門性のほうも重要ですが、教師の増員など教育条件の充実も喫緊です。OECD（経済協力開発機構）最下位の日本の教育予算です。京都市では桝本頼兼市長のマニフェストに基づき、独自予算で小学校一、二年生に三十五人学級を導入していますが、さらに来年度から独自予算で中学三年生の三十人学級を実施します。

教育行政にいる者としては現場主義に徹して、学校、家庭、地域の共汗関係をこれから一層強化していきたいと考えているところです。

向山　挑戦が続きますね。

門川　はい。大事なのは〝立ち向かう楽観主義〟だと思っています。明治維新を成し遂げた先人たちは西欧との経済力、文化力の格差に愕然とした。だが、悲観主義ではなかった。行動すれば必ず道が開けるという自信を持って問題に立ち向かっていきました。私たちに必要なのはこれです。制度が悪いなどと言い訳せずに、現行制度の中でも当事者意識を持ってやれることは何でも精いっぱいやっていきたいと思います。